



Sedge（セッジ）：菅（すげ）製スピーカーの骨組み（photo by Shingo Kurono）

技と経験値と発想の出会い

富山県高岡市の職人とクリエイターの協働によるプロトタイプを発表。

「ものづくりのまち高岡」の新たな取組み「Creators Meet TAKAOKA 2020」成果報告

富山県高岡市が2019年度から取り組んでいる、伝統産業の工房とクリエイターのコラボレーションによって、日本の手わざの新たな価値創造と関係人口作りを目指す事業「Creators Meet TAKAOKA」。2019年の東京でのPRイベントおよびモデルツアーに続き、2020年度はさらに一步踏み込んで、実際にクリエイターと高岡の工房が協働し、作品や商品、素材をつくりだす、新たな展開に取り組まれました。

8月に実施したクリエイター募集では、4組の枠に20組の応募が集まり、その中からプロダクトデザイナー、新素材開発者、音楽家など多様なジャンルのクリエイター5組の参加が決まり、金属工芸・漆芸・菅（すげ）細工の工房6社とのマッチングが行われました。うち2組が2019年度に引き続いての参加となり、地域とクリエイターとの新たな関係人口づくりにもつながっています。

まずは産地の全体像や風土を体感してもらおうと、参加者全員で全ての協働先工房を巡るキックオフツアーを実施。その後、コロナ禍ではありましたが、オンラインを活用して各チームは打合せやディスカッションを重ね、この度プロトタイプを発表しました。

鑄造と磨きの技を活かした真鍮製の燭台、新素材樹脂と漆の組み合わせによるアクセサリ、仏具の「おりん」の音を使った楽曲、菅製のスピーカーなど、職人だけでもクリエイターだけでも生み出せない、まさに両者の出会いの化学反応によって生まれたユニークな提案がなされました。どのチームからも聞かれたのは、工房のものづくりに対する真摯さ、製品化における諸問題に対応する経験値への信頼、クリエイターの新鮮な発想に始まるものづくりの歓びといった声でした。今後の製品化やイベントでの発表に向け、各チームは今も意欲的にプロジェクトに取り組んでいます。

Creators Meet TAKAOKA 2020

主催：富山県高岡市

企画運営：一般社団法人富山県西部観光社 水と匠

広報：有限会社エピファニーワークス

*文化創造都市高岡websiteにて、事業を紹介：<https://bunkasouzou-takaoka.jp/>

●参加チームの提案紹介

能作×Hamanishi DESIGN：「燭台」

日本の伝統産業を牽引する金属鋳造メーカー「能作」と、2019年度のモデルツアーにも参加したHamanishi DESIGNのプロダクトデザイナー・鎌田修さんによるコラボ。

「溶かして」つくる高岡銅器の鋳造工程が、視覚的に表現されたポップなデザインが特徴の「燭台」。溶けてみえる上部は鏡面加工、土台となる下部は鋳肌そのものと、真鍮の違う表情がひとつの製品に同居している。

「錫のイメージが強い能作さんの中で、この燭台が真鍮の商品を代表するものになれば嬉しい」と鎌田さん。デザインを主に担当した濱西さんは、能作のデザインリテラシーの高さとプロダクト開発のスピード感に驚いたと言う。チームでは和蠟燭も開発中で、燭台と蠟燭のセット販売を検討している。仏具としてではなく、文具やインテリアといった売り場で、「炎を眺める時間」をひとつのライフスタイルとして提案していく予定だ。

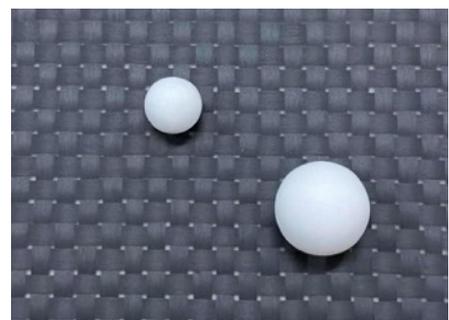


漆器くにもと×三井化学MOLp：アクセサリー「縁・円」

漆器の企画問屋「漆器くにもと」の協働先は、三井化学社内のメンバーによって立ち上げられた有志グループ「MOLp(Mitsui Chemicals Oriented Laboratory)」。これまでも異業種と様々なコラボを手がけ、アンリアレイジ、ルイヴィトン、フェンディといった大手メゾンがMOLp発の素材を使った製品を世に送り出し、話題となっている。MOLpのメンバーの一人・宮下友孝さんが昨年度のモデルツアーに参加したことから今回につながった。3つの提案がなされており、サンプル試作が進んでいるのは、経年変化を楽しむ漆のアクセサリー「縁EN・輪WA」。三井化学が開発した、海のミネラルから生まれた樹脂「NAGORI™樹脂」と、植物由来のウレタン樹脂

「STABIO®」で成型したアクセサリーに漆を塗布。木地を基本とするこれまでの漆製品にはない、重みや透け感といった新たな質感の創造が期待される。「プラスチック＝偽物のイメージがあるが、生分解性や熱に強いなど様々な機能を付加できるので、そこに工芸の精神を加えて、今の生活に対応できるものを目指せたら」と漆器くにもとの國本さん。

その他、和紙と三井化学のポリオフィレン合成パルプ「SWP®」と漆のコラボレーションアイテム企画、漆器くにもとの地場ネットワークをいかした金属製の防音ボードの台座製作も進行している。アクセサリーは来年3月に青山で行われるMOLpの展示会でお披露目、先行予約の受け付けを目指している。



竹中銅器×TakashiTeshimaDesign：「Re Produce」「TO YA MA」「Still we live」「Gradation」

高岡銅器産地で一番の規模を誇る企画問屋「竹中銅器」と組んだのは、プロダクトデザインに加えてファッションアイテムの製作販売もおこなう、手嶋隆史さん。4つの方向性から金属鑄造の表面加工の可能性を探る取り組み。一旦すべてのアイデアを具現化し、そこから製品化に進めるものとそうでないものを精査していく。

Re Produce：「つくらないでつくる」「解体と再構築」といったテーマで、既存の香炉や花器などを切断し、いくつかの製品に再構築。

TO YA MA：黒部溪谷を表現したトレイと箸置きセット。トレイの青は銅の緑青、箸置きの赤は漆。高岡の産地内できりだせる色や質感の幅広さが感じられる。

Still we live：外側を磨き上げたソリッドな塊の中に、ひび割れた内側を緑青で仕上げた花器。ヒビの入った金属塊にはかなりの迫力がありそうだ。使いながら緑青の色を育てていく面白さも。

Gradation：鏡面加工から緑青による着色の色だけでない質感のグラデーションをみせるもの。花器またはタンブラーを想定している。

「職人さんがムラだと感じる製品ごとの色の違い、グラデーションのばらつきが、かえって一点ものとしての魅力を感じる」、と手嶋さん。「慣例的にやろうとしないこと、思い込みでやならないことをやってみようといわれて、試して気づかされるのがすごくあった。海外の展示会なども意識して、販路を考えていきたい」と竹中銅器の喜多さんは意気込みを見せている。



上：Re Produce 下：Gradation

佐野政製作所×shy shadow：三次元の国旗「View Point」

オーダーメイド品の受注製作やオリジナルの数珠かけを製作する銅器メーカー「佐野政製作所」と、20年間アメリカのプロダクト業界の一線で働いてきたデザイナー・芳村朗さんチームが作るのは、三次元で表現した国旗のオブジェ「View Point」。

写真は木型だが、完成品は真鍮製を予定。着色はせずに、表面加工で色の違いを表現する。大きさは6cm×4.3cmほど。「あらゆる角度から彫刻的にみてほしい。ある物事を違う角度からみたらどうなるんだろうと、このオブジェが視野が広がるきっかけになれば」、とデザインを提案した芳村さん。

「イメージの枠外から来た、全く予想していなかったアイデア。絶対に世の中にない、凄く良い、ぜひやりたい。独特なカーブや段状の形など、自由に形を作る鑄造の良さも活きる。持った時の金属の重さも感じてもらえたら」、と製品化に向けて取り組む佐野さん。



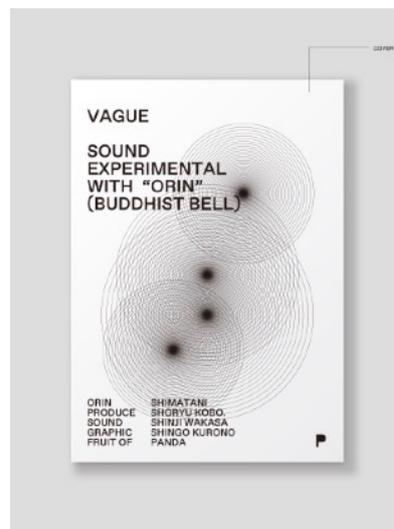
シマタニ昇龍工房×未音（ひつじおと）制作所：おりんの奏でる音楽「Vague（ヴァーグ）」

音楽クリエイター/アーティストの若狭真司が主宰する「未音制作所(ひつじおとせいさくじょ)」は、今回二つの工房との協働を行っている。一つは「シマタニ昇龍工房」。職人の数が全国でも10人に満たない「おりん」をつくる鍛金の工房で、2020年には曹洞宗大本山・永平寺のおりんの修理も行なった。

おりんを鳴らした音とおりん制作時の音（焼成音など）のみをプロセッシング（音の波形の一部を切り取ったり、表情を変えたりすること）し、おりんをつくる過程をコンセプチュアルに表現した5曲の楽曲を制作する。2020年11月に高岡・伏木にある古刹『勝興寺』にて、手のひらサイズから数人がかりでないと運べない巨大なものまで、島谷さん製作の多数の「おりん」を持ち込み、レコーディングを行った。

「おりんそのままの音と加工した音を組み合わせ、いろんな表情で表現している。おりんの音は純粋音に近い、すごくきれいな波形を持っているので、加工しても混ざり物がない、きれいな音になる」と若狭さん。楽曲は全方向から音が聴こえるような、5.1chサラウンド立体音響再生可能環境を想定。勝興寺でのオンラインライブ（観客を入れるかどうかは検討中）およびインスタレーションの発表を目指す。動画・写真のアートワークも制作し、CDと合わせて商品としての流通も目指す。

「ずっとおりんを仏具ではなく楽器として提案したいと思っていたので、こういう機会をいただいて本当に嬉しい。」と島谷さん。



高岡民芸×未音制作所：菅製スピーカー「Sedge（セッジ）」

若狭さんのもう一つのコラボレーターは、菅の栽培から加工までを一貫して行っている「高岡民芸」。福岡(高岡市・旧福岡町)の菅笠は時代劇や全国の祭などの需要に対してシェア9割を誇るが、元が農閑期の内職だったことから工賃が安く、高齢化と後継者不足が深刻化。そんな中で、中山煌雲さんは産地唯一の若手として、アートピースとしても飾りたくなる菅笠づくりに邁進している。

このチームからの提案は、菅製のスピーカー。写真は骨組みの状態、これから菅が編み込まれていく。プロダクトデザインは、Vagueでのアートワークも担う黒野真吾さんが担当。「実際に見るとかなりの存在感と高級感があります。モダンさのなかに民藝的な、土地から立ち上るような空気感も感じられて、ほんとうに格好良い」と語る若狭さん。「発想が基本的に「笠」から離れない。スピーカーなんて考えつかなかった。突拍子もない提案をもらえてすごく嬉しい」と中山さん。



Creators Meet TAKAOKA 2020

高岡の伝統的な手わざとの
コラボレーター募集!



●Creators Meet TAKAOKA

400年以上続く銅器・漆器などの伝統産業から近代産業にいたるまで、日本海沿岸を代表するものづくりのまちとして発展してきた富山県高岡市が、2019年から取り組んでいる事業。

「ものづくり」が盛んな地域の特徴を生かした新たな「関係人口」作りの取り組みとして、また、さまざまな課題に直面する地域の**伝統産業の活性化**にもつなげることを目的として実施している。

2019年度は、東京でのPRイベントおよびクリエイターを招いた「高岡体験モデルツアー」を実施し、2020年度は高岡の工房とクリエイターが実際に製品や作品の共同開発を行なった。

主催：富山県高岡市

企画運営：一般社団法人富山県西部観光社 水と匠

<https://bunkasouzou-takaoka.jp/>

下記より宣材写真などダウンロードいただけます。

<https://bit.ly/3bJfSn6>



本事業の広報担当：有限会社エピファニーワークス

〒939-1119 富山県高岡市オフィスパーク5番地 富山県総合デザインセンター2階

Tel.0766-54-6210 Fax.0766-73-6886 info@epiphanyworks.net

<https://www.epiphanyworks.net/>